

門 凡 4  
3525  
卷 4

金毘羅奉詣名所圖會卷之四

目錄

- 掠本漁村の圖
- 江浦山
- 圓柏岩窟
- 鳩の岩窟
- 行人の岩窟
- 行道場忍草石
- 古城の趾
- 秩父峠
- 仁保の浦
- 加茂の神社
- 天神島
- 鷹巣山
- 鶴嶋 龜嶋
- 平石遊真の圖
- 大垣石 小垣石
- 高藤釣石
- 瓶石 墓石
- 二見の岩家石
- 鳥帽子石
- 帆解崎
- 長磯 寺浦
- 挑の隈
- 仁保山妙見社
- 箱の岬
- 大濱積ノ浦
- 生利の濱花御前
- 船越八幡宮
- 杏田の浦
- 尊澄親王御跡の圖
- 備打八幡宮
- 託磨牧
- 鯛鱈の漁場
- 躰細の圖
- 浮島神社
- 辛嶋辨天祠
- 金島獅子嶋



昭和十六年一月十一日  
尼野貴英氏贈

見立峠

迦毘羅衛院奥院

子育観音

十四橋

道隆之塔

光明菴

頼之軍勢指揮の圖

亀石権現の社

道範寓居の古趾

加持水 揺岩

飯の山権現の社

白河原風が浦

浴巾掛松の古木

大師産鹽

多度津の湊

鴨の神社

榜握清水

同掛引松

鶏足津

聖通寺

聖通寺山の古城

先頭寺強力の圖

迦毘羅津の濱

雨乞地藏

海岸寺

道隆寺

忍ヶ岡

法然上人奇特の圖

青の山

鶏足津の古城

野澤の水

川津の梅の圖

坂出の濱

筏石

産湯の水

熊手八幡宮

鎮守妙見祠

塩屋の天神

田潮八幡宮

小鳥明神社

道揚寺

巖の薬師

飯の山

飯の神社

金四ノ目ノ一

魚の御堂

水漁薬師堂

崇徳天皇社

求聞持石

關加井

八十八の水

金山権現祠

四脚の鳥居

白峯の古城

底無川

地藏堂

横塩の神社

福江大師堂

二十騎討外の趾

五夜ヶ嶽

悪魚退治の圖

妙成就寺

遍照院

清氏討死の圖

雲井御所の旧趾



金四ノ目之二



金四ノ一

江浦山

標本村あり有明の溪より磯づみ行程僅かして至る麓は標本の漁家多し

圓拍窟

海面の岸より巖の岨より圓拍あり生出す繁茂の下は岩崖ありて石壁滑りて此のこゝに奇石怪岩あり

鳴之崖

同岩崖ありて鳴ありて巢とつらう此に栖あり主人鳩部屋とつ

行人之窟

行者らふ来つて修行と事時をりて實小世産と云ふなり彼浦の音松のせ千鳥踏のまのの舩耳に礎ののちと出地なり

行道場

右に同地蔵不動役行者の石像あり

忍草石

山上あり石中の忍草の紋ありて破て石を紋ありてなる一石ありて忍草根志曰美濃国養老の山中に忍草石ありこれと云ふは忍草の葉の形ありて最鮮なりこの所のたけいなり

古城之趾

同山上あり細川何某の菴あり其支跡亦洋拾遺進考の部に委す

扶父岨

山上石のせむあり七月廿四日遠近より群衆あり上下十八丁の時なり

仁保ノ浦

仁保村の溪より此浦里十軒許り在家の農工商も多しかくは海田の漁家あり電あり丸舟便の湊ありて豊見せり

賀茂神社

仁保村より生土神あり則ち鴨皇を神宮と云ふ例あり九月十四日神楽渡御あり舟津の類ひありて芝居をせぬありて大いなる

天神島

仁保の濱の向より音公勸禱の社あり濱辺より二丁半あり

鷹巢山庄内嶋

も仁保の濱の右の方よりあり

鶴島

仁保の正南にあり鶴島の左よりあり二丁半あり

平石

仁保の濱海中より石の面あり長八寸半幅五向余あり石の面は平石と云ふなり其石の形は平石の形に似たり

大俎石小俎石

平石より貴人より俎石と云ふなり此石は庖丁の徒料理の湯石用なり

高麗犬石

霍島の際より其形拍犬の如き大石あり

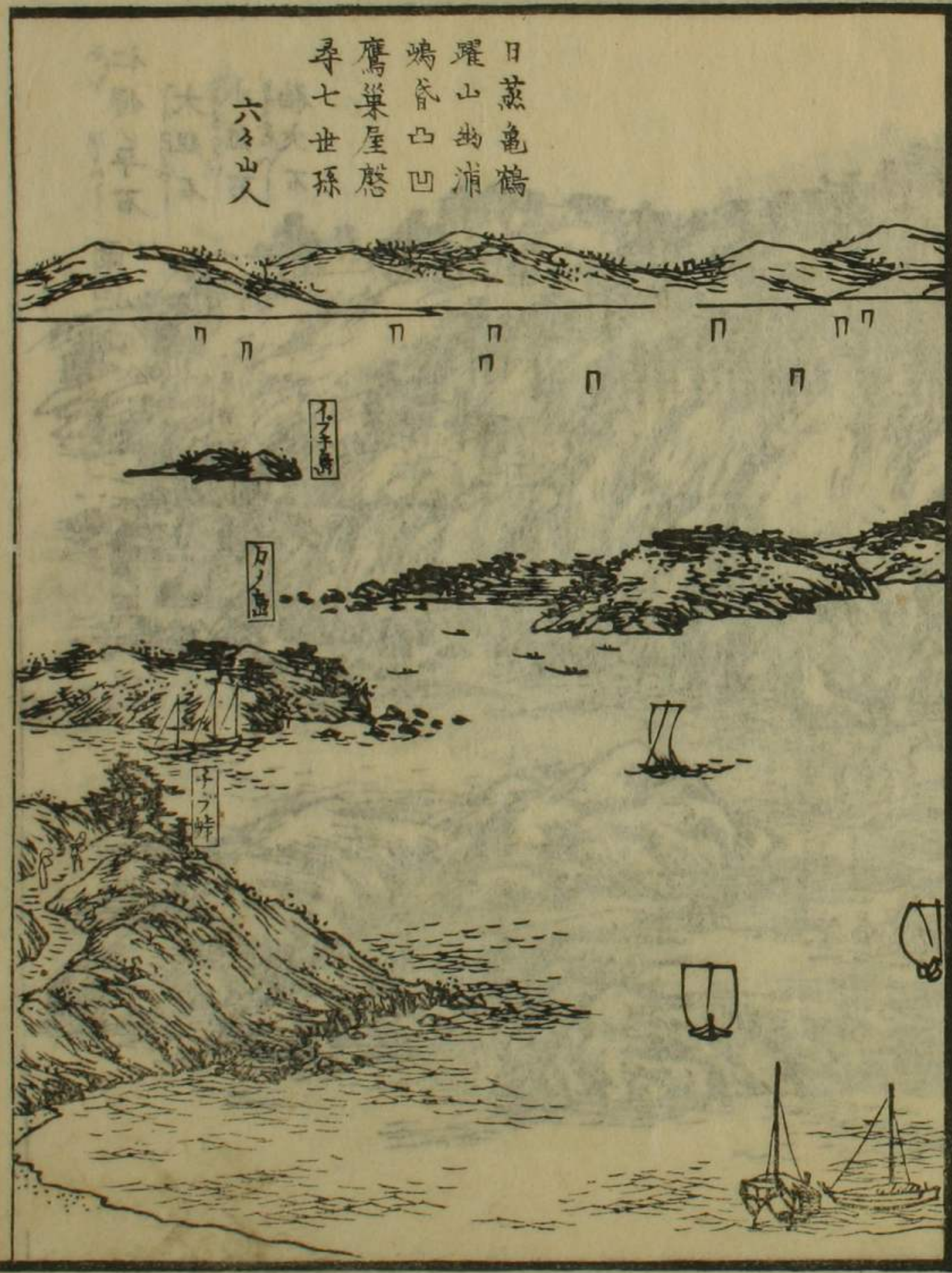
瓶石巖石二見岩家石烏帽子石

霍島の廻りありつれも其形は彷彿あり

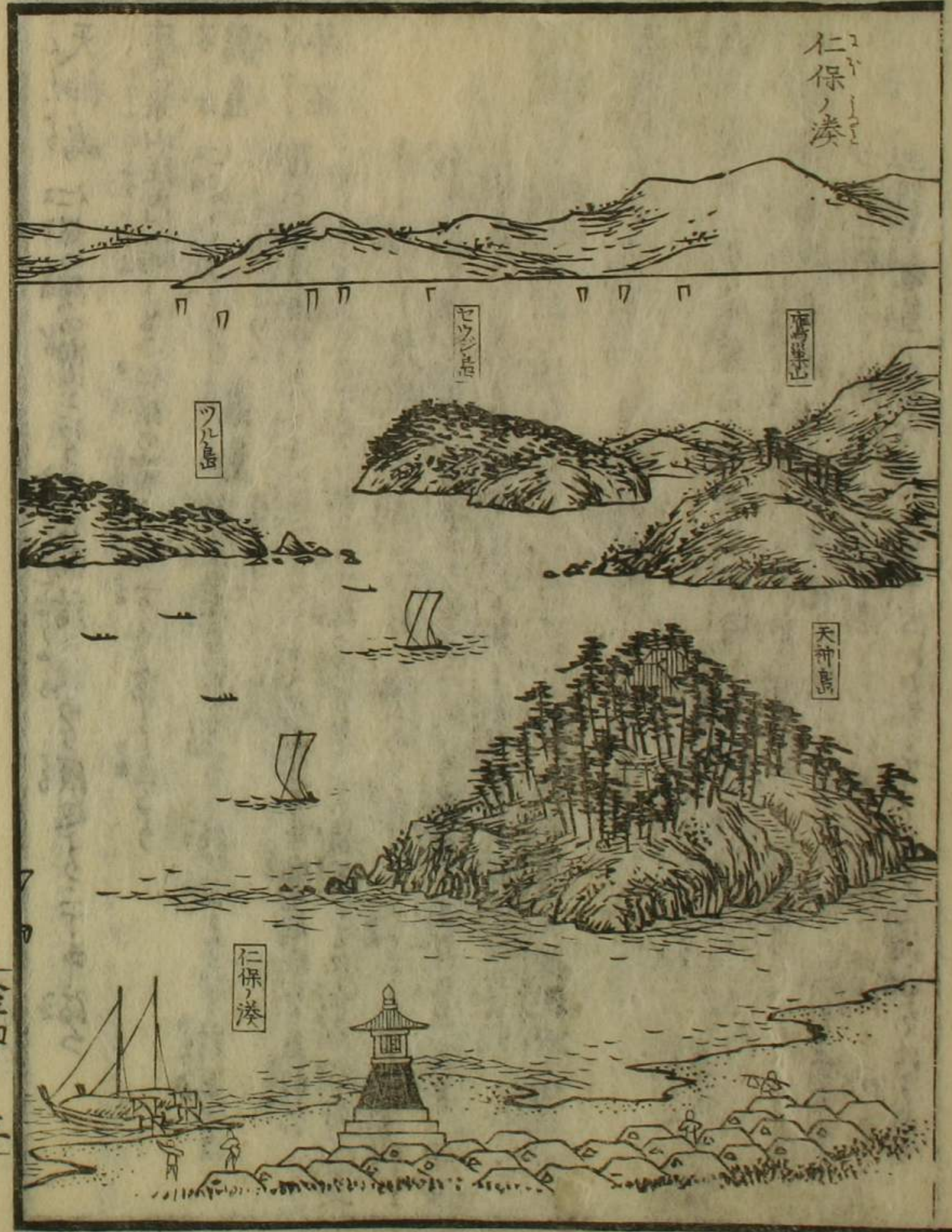
帆解寄長磯寺浦桃之隈

長磯寺の浦より海に三丁あり海に三丁あり海に三丁あり

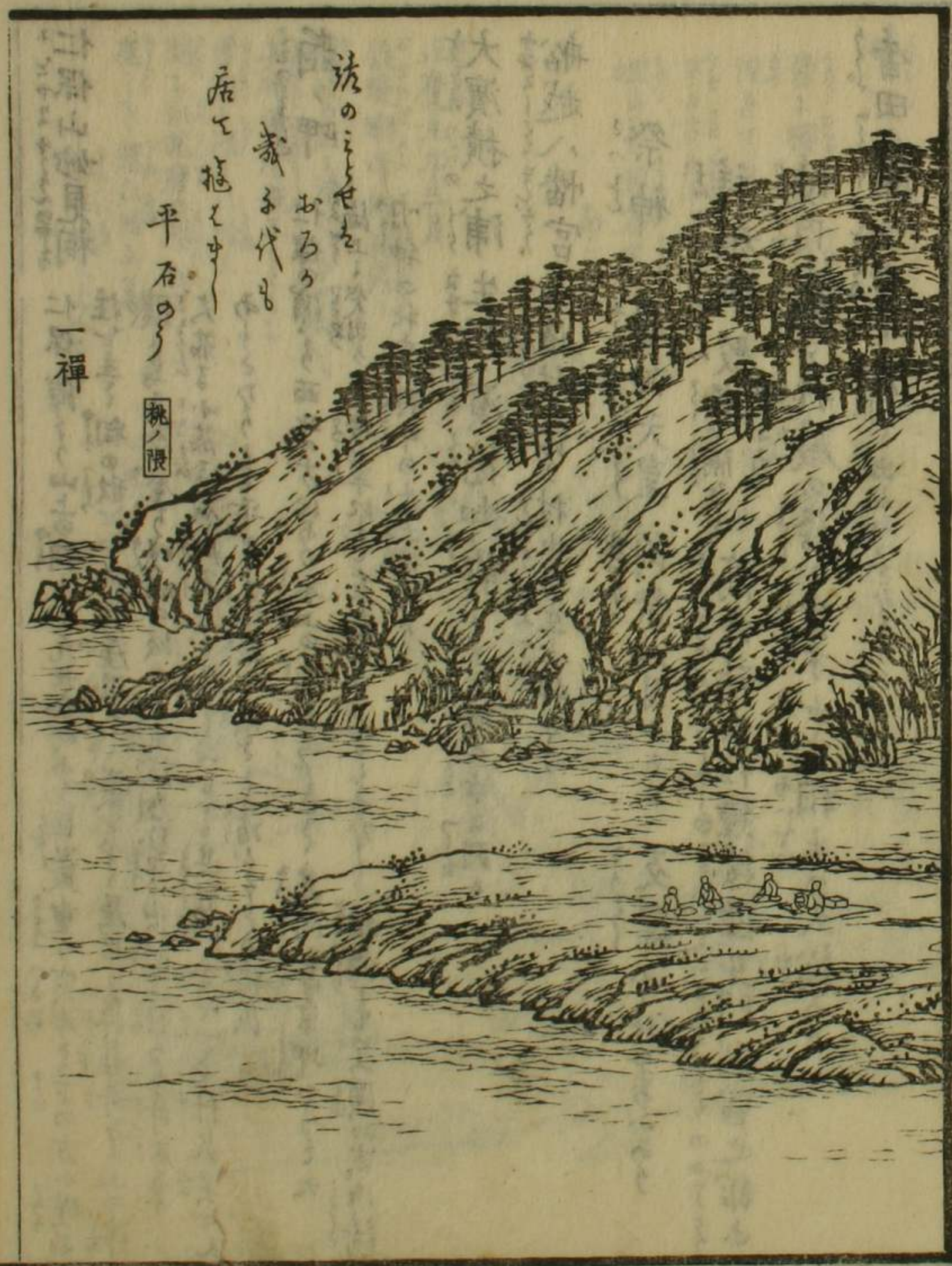
生にあり龜島人家はとて平石にありて



日蒸龜鶴  
躍山物浦  
鳩昏凸凹  
鷹巢屋窓  
尋七世孫



金四ノ三



金四ノ四



仁保山妙見祠

仁保浦より山上の祠を凡廿余町あり巨巖重り突出る下の方小僅に柱をまき祠の形を以て小屋根より巖とて屋根と凡甚奇なり山の半腹に鳥居あり登り嘆息の坂なり其の左の山の岨に巨なる奇石あり大茄子小茄子石虎石など号く其の形似るを以て林氏君んわんわんたりとて平生に後世を後とて海を渡るの途に

箱ノ岬

仁保の浦より西北の方にあり本山の麓よりつゞき其間七里の岬なりと云海上に突出る支披羣にして左右をささぐり箱浦とも又濱の方江崎明神の社あり村中の生土神なり

大濱積之浦生利濱花御前

大濱積之浦生利濱花御前とも岬の本に列る船越八幡宮 大濱村より村中の生土神なり

祭神 應神天皇 例祭八月十五日 反橋 本社のあふあり

拜殿幣殿 橋と隔たり 高良社未社鐘樓隨身別當之館本

境内小列を拜殿の傍に男木女木相生の大松あり

香田ノ浦 大濱より純回に出るわんわん

尊澄親王御旧跡

流しては朽ぬむりや月の舟と勅を 下の方中へ 埋まき俳名空り



正慶元年三月 後醍醐帝御謀叛 隠岐の国に流され給ふ 其時尊澄親王もも 當国に流され給ふ 則ち此荒磨の浦里に 座し給ふ 太平記より

妙法院尊澄親王御舊跡

海辺近々雨されが毒霧沖身と侵し、瘴海氣冷しく漁歌技苗れ

夕の声嶺雲海月の色とてく耳觸と眼遮る夏の衣とて佳し、津候

と添る媒とてくいといふ又さういふ

傳去此地の海辺の片鄙がれが雅わのく沖心と慰め奉る者もわがばりが當

郷の生玉神、瀟打八幡宮の列當平生に奉り、沖物語の相合とてく、沖心と

慰め奉りし、其後天皇隱岐の国より沖、辰洛つき、尊澄親王も皇

都へ皈らせ、是よりつて被列當の僧も恩賞と賜りし、今尚此

社僧と云く、檢校と称ん

瀟打八幡宮 花間村あり、當村中の生玉神あり、海辺の山に御本社あり、藤原の登之數百

祭神 應神天皇 本地堂 阿弥陀如来

末社 白鬘明神 御輿舎 鐘樓茶所 隨身門 本社頭 二列に

詫磨牧

今其古跡詳なり、河と山に分るべし

三代實録曰、貞觀六年十二月九日、年停廢、濱岐國三野郡詫磨牧

鯛鱸之漁場 大濱、詫磨の向捕魚と云ふ所、鯛と云く、漁人又大濱より三甲、かう、沖の方

鱸と捕る流し、網とて之を具、其頃、九月四日、頃、十月、以前、より、大なる

長六、七尺、中、の、先、漁師、魚、集り、し、と、艦、と、數、十、艘、の、船、と、列、し、魚、は

後、辺、より、漕、ま、さ、り、し、類、り、小、追、ふ、魚、逃、ま、し、し、終、つ、て、勞、と、辭、さ、し、其、一、た

先、進、したる、船、より、數、石、と、投、る、魚、は、く、驚、と、引、し、し、道、と、ん、と、さ、る、時

網、を、風、し、し、一、尾、も、洩、さ、し、網、と、た、ら、し、し、攪、網、と、さ、し、し、取、り、

鱸、の、中、に、俗、用、に、し、し、春、月、を、出、る、と、記、し、書、な、ら、せ、る、な、ら、し、し、の、形

腹、小、く、狭、し、故、小、狭、腹、狭、腰、と、稱、さ、る、

南産志、士、馬、鮫、魚、青、班、色、無、鱗、有、齒、一名、章、鮫、小、者、曰、青、鮫、前

鱸網

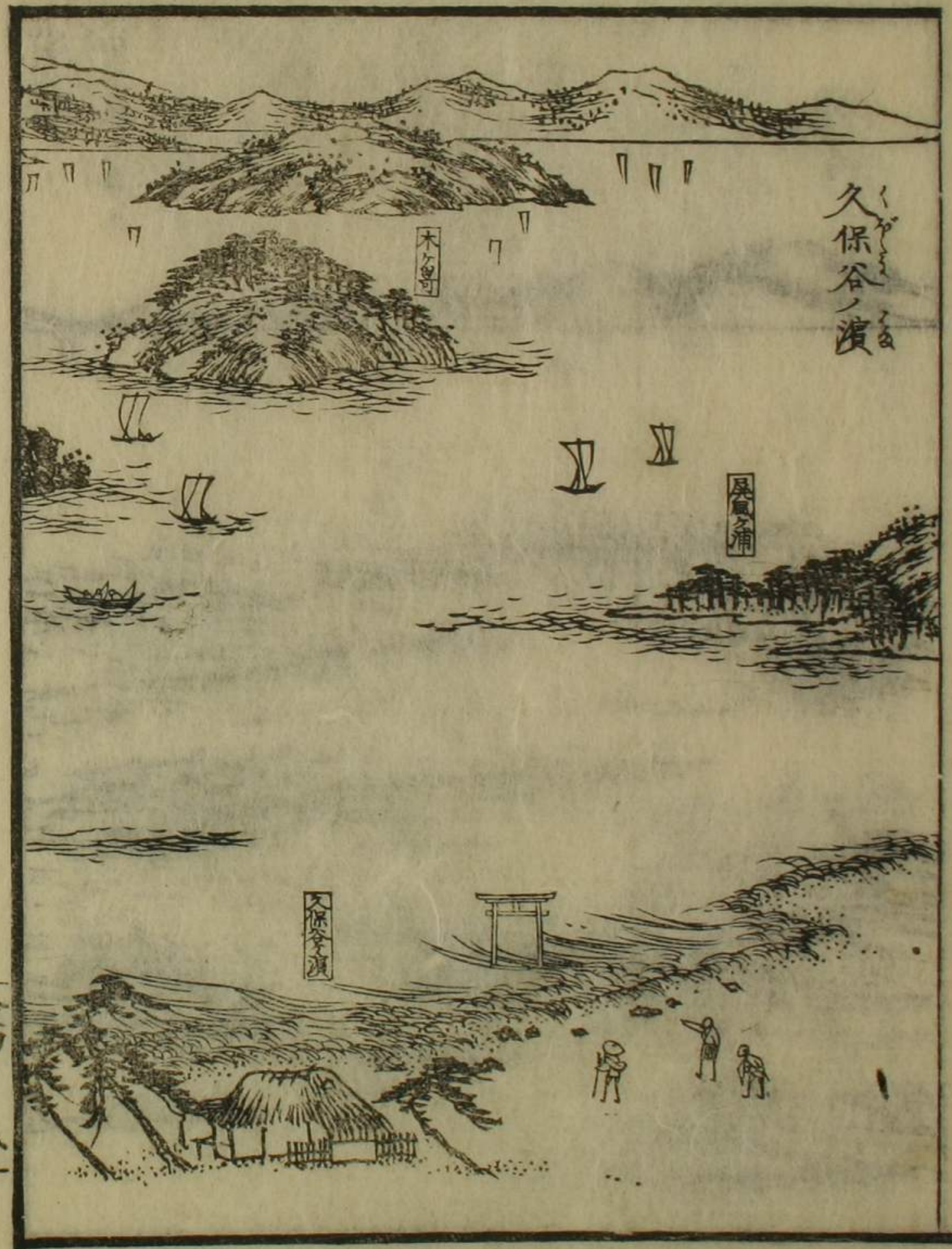
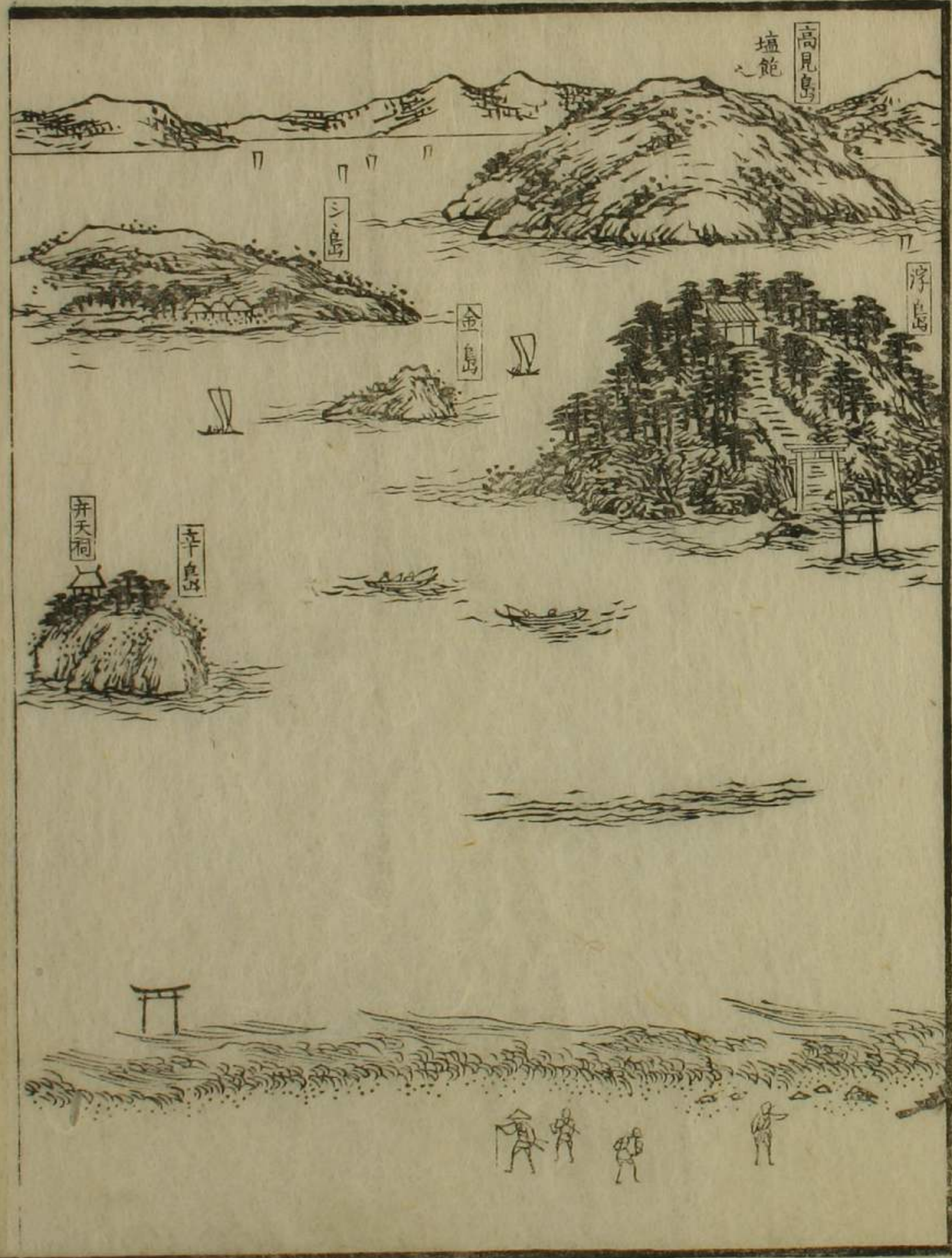
魚と捕る者と漁夫と  
し黙とる者と獵師と  
漁獵ともふ既  
神代より有く火酢芥命  
よく海の幸と得る  
弟の彦火々出見尊ハ  
山の幸と得る  
而して互し  
之と易くし  
兄ハ弟の弓矢と  
山入  
獸と獵と



金四ノ七

弟ハ兄の  
釣と取て海  
入くし海を  
釣と取て  
日本記  
是漁獵の  
ソム





本朝是より門を獲腹を充ちる鱈鮫。章鮫とも佐波良と別を青魚  
魚是と佐古之と云

唐墨馬鮫の鮫と乾し製は色形即唐の墨に似ると云く石付  
味は甘く微し澁し然るも鮫の鮫の唐墨に如く當地より製す  
同所より仁保の浦鮫者其の辺から多し漁は夏月より云々

文字 鮎鮎 以上三字とも古より加未須小用也

浮島神社 山の上と云はり壬入津島天皇と云祭神未詳

辛島辨天祠 浮島の左の方より小島なり辨天の祠あり

金島志々島木ヶ寄 づとも久保谷の濱より眺るの島と云風景より

見立峠 西麓に見立村属東麓は白浮村属は故白浮峠とも号す上は丁辨

屏風ヶ浦 白浮の浦より九つあり大麻山の浦より此海辺より一帯の海と云

迦毘羅津濱 白浮の濱と云 筏石 同所あり

経納山迦毘羅衛院海岸寺 白浮の濱あり弘法大師の古跡と云

奥院 弘法大師幼兒之尊像 長凡二天許誕生の尊像と云

脇擅 左右に大師の父母の本像と安楽寺傳を又佐伯中納言の御

四天王 大檀の四方あり何れも大師の作らふ

大師堂 本堂の傍より正面弘法大師の像左右某師観音と安ん

浴巾掛板 大師堂の前より大師幼童の時浴巾を平すに掛りて今に掛

雨乞地藏 取懸の時杵と云 産湯水 大師誕生の時産湯より用ひ清水之

子育観音 産水の傍より 産鹽 大師誕生の時月ハ鹽なること此處に

五岳山善通寺の誕生院と号し大師誕生の旧地と云此亦之誕生地

古跡なりと云是非詳からん一説は大師の御父佐伯善通之座郡と云



今の善通寺の地に住住此白浮の別業あり故に此所にて誕生ありしもヤト六  
 本坊 奥院の境内に堂舎あり 方丈客殿庫裡大師堂あり

金四ノ十



金四ノ十一

熊手八幡宮

扇形が浦多度津御道の傍あり

本社祭神應神天皇 末社 本社の傍に数多あり

神楽舎 鐘樓 隨身門 額面弘法大師産神社とあり

神寶熊手 神代の兵器なりと云

十四橋

海岸寺の奥の方より橋の結ぶ石と建始板橋は近世石橋更

十 經之營之爰為石扛石扛維貞

銅橋 不審不崩萬億斯年永福大拜

寛政五年癸丑初冬

細字不合畧之

多度津湊

丸龜の舟着より二里余西なり是より金毘羅山へ来たの行程三

此津の圓龜小濱と云の勢昌の比る原末波塘の構より入船の便利

きざ故に湊に泊る船形は濱辺の船宿旅駕屋建つべき或は岸に上酒

者賣の出店温枕蕎麦の撰賣甘酒原菓などあり者住来たの

其都合よきと云此船と待せ糸浦と云の多

素田山明王院道隆寺 多度津より八丁并東加茂村より四国灵場七十七番の札所也

本尊 薬師瑠璃光如来 立像の長二尺五寸弘法大師作平地東向あり

鎮守妙見祠 本堂の左 大師堂 本堂の向に 鐘樓茶堂善清小堂 皆門内

二王門 金剛力士の 本坊 加茂村の在る此本坊

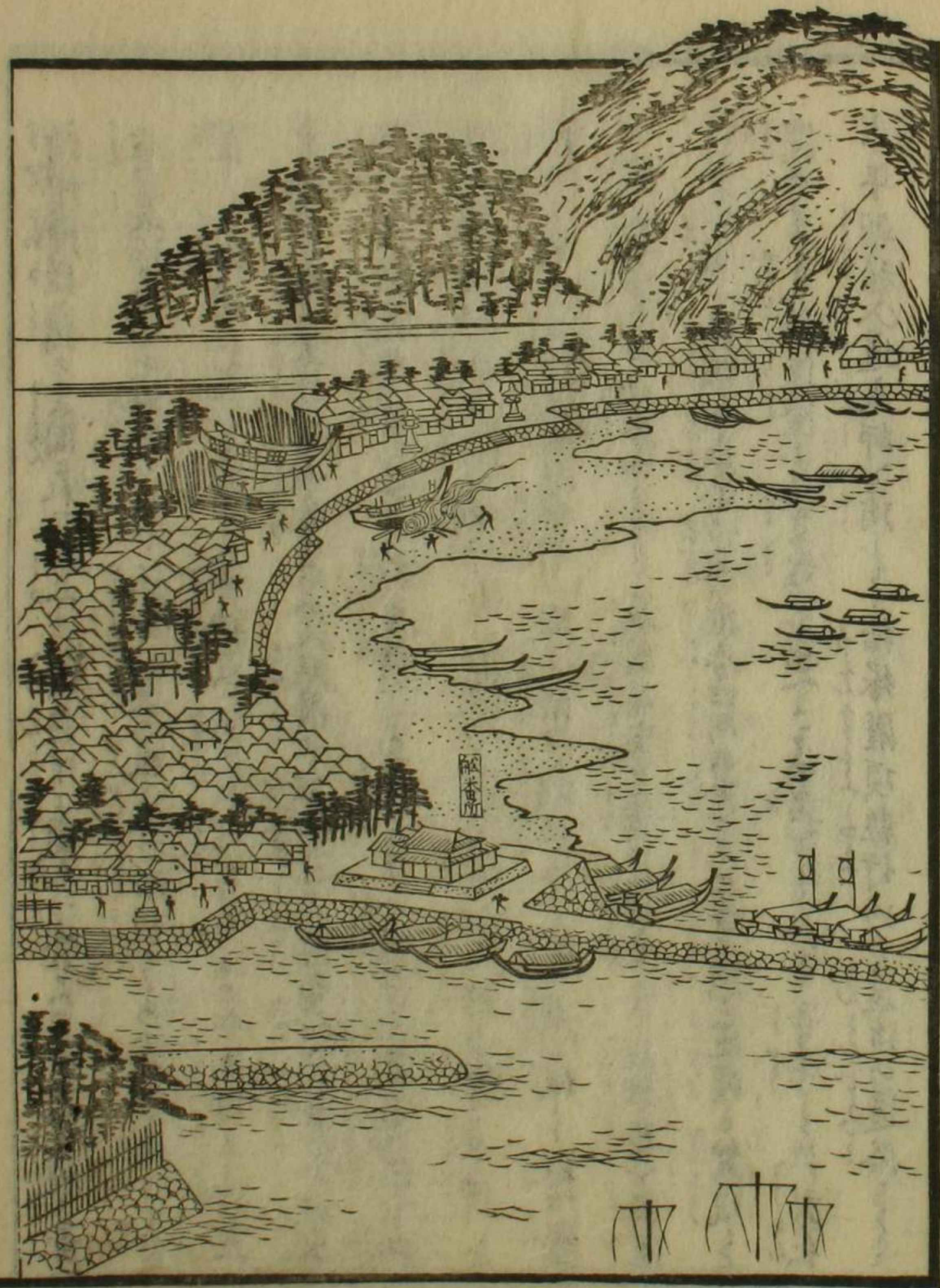
道隆之塔 本堂の裏の方には石の五輪なり開基和氣の道隆の古墳より墳前と標れ

當寺は八皇四十三代元明天皇の御宇入江乙長和氣の道隆といふ人ありてこれを

啓迪と云ふ道隆は景行天皇十三世の苗裔八那珂郡本徳の尸王和氣善

茂の次男なり嘗て道隆所持の園北加茂の郷小なりと云す千株の桑と標る





金四ノ十三

多度津

所謂讚治の國の素園これらなるに其森中ニ圍九一丈五尺の大木有り種々奇  
怪の支るにやて此樹を伐て薬師如來の尊像を彫刻す小堂と作て安  
置一且暮にこれと信を時天平神祇二丙午年秋七月十五日午之射年齡九  
十九を卒其後孫朝祐とつて延暦廿二癸未の君夢の告と蒙て弘法大  
師よりひく先祖の夏とがう彼桑佛とて奉りて小像をなす大像と大  
師より請ふ大師其篤信と感ドたまひ長二尺五寸の柔師と作り右の柔佛と  
胎中ニ納と水世不失の秘計小擬一給て朝祐より真乘の飯一鬚髪  
と剃て戒とけ世塵とさく家園分室と捨て捨舎と此本尊と安置  
くく大師と供養一奉て境内標分四四方とトウ堂塔と建願を梵風と  
究めり先祖道隆より夏起るがゆゑその名とての寺号とん弘仁  
末年朝祐入道大師と請りて結縁灌頂執行りて遠近の道俗とく

隨ひて相逐まへ人跡とてまゝ市とてり此時寺と十餘宇作る群衆の  
人とのとる命より佛法紫真の區となり真雅僧正命ふりて住  
給ひ後小聖宝尊師も住一給ふ然るに一と六變を羅り殿堂悉く焼亡  
いやく昔の昔の似どなりぬれども往古の遺具とて什宝飾をたてり  
事とをけは是と畏人  
鴨神社 加茂村あり當村の庄土神を遷宮祭祀道隆寺より執行人  
道隆寺 祭神鴨大明神と祭る  
寺紀 曰人皇六十二代村上天皇天曆元丁申の春二月那河郡真野の池の塘  
損壞する夏數度おふ故に貞憲初より地法法守明神遷宮と執  
行せしむと云 是則道隆寺第七世よりとせ  
義經寄附状 義經八島合戦の初當社に祈誓とけ給ひ翌年飯城の後  
大般若經 我藏坊女芝寄附一 右由社の行室に申すの勅禱を乞ふ  
奉る祈り

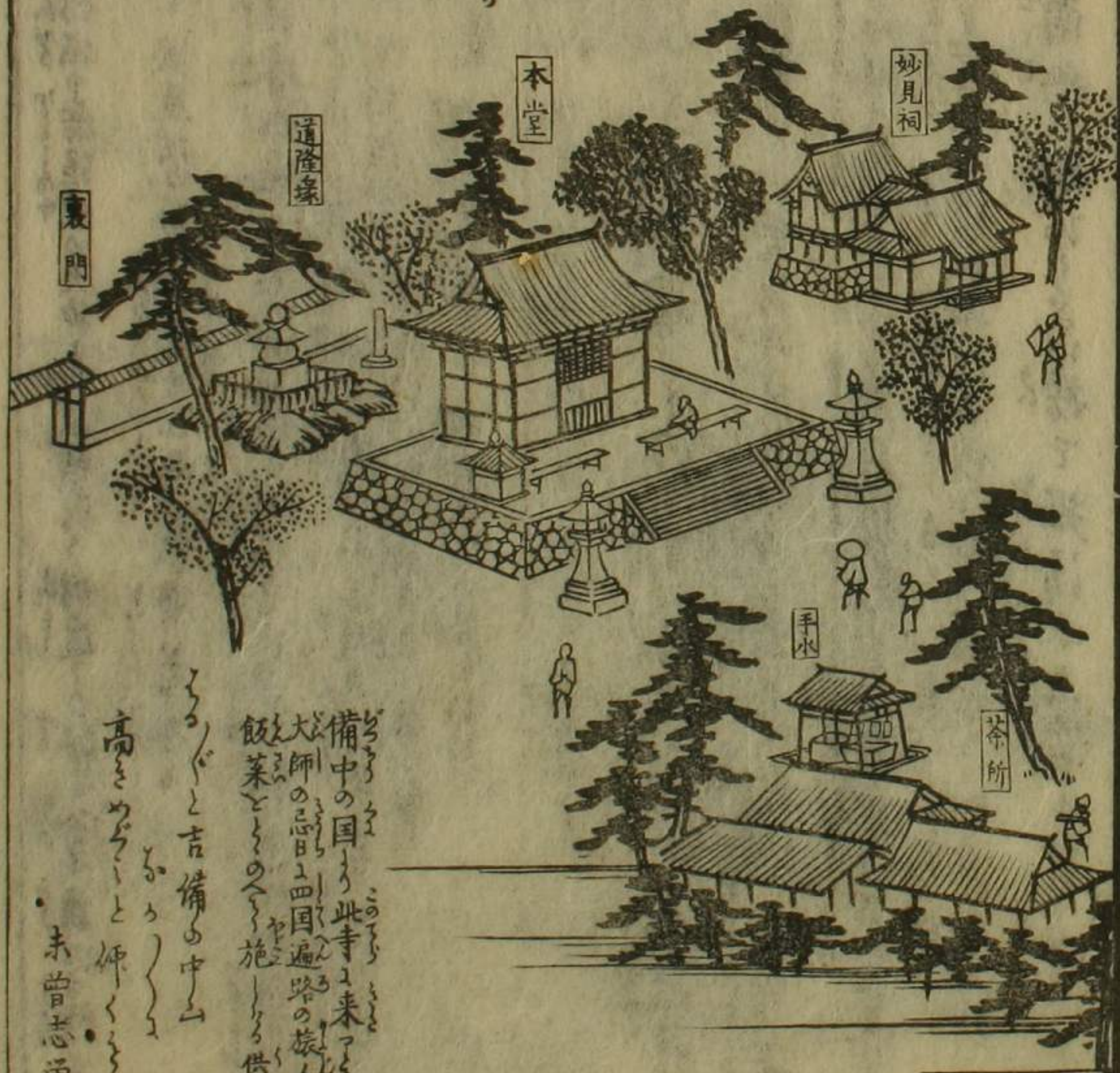
道隆寺

閩田耕筆、象頭山より一里  
 余の所と道隆寺と云寺、  
 古墓あり、道隆親王と  
 孔と建、親王、必ら、誤、  
 中関、道隆公、之、此寺の  
 造立、主、即、寺の号、  
 呼、  
 入、或、曰、道隆の古跡、  
 讚岐、国、加茂、より、  
 明王院、道隆寺と云、  
 右、説、も、非、  
 當寺の開發、  
 和氣の道隆と云人、  
 より、起、と、り、  
 道隆寺と号、と云、



金四ノ十五

史實寺記、  
 詳、  
 後人、道隆の  
 文字、同、史  
 考、誤、  
 又、當寺の  
 建、石、  
 道隆親王と  
 云、  
 不當、  
 世、斯、例、  
 少、



備中の国より此寺に來、  
 大師の忌、四国遍路の旅人、  
 飯菜と云、之、施、供、  
 高き、  
 未曾、志、  
 田、坊、

因心が岡 傍堀の傍に屋の天神より東南より街道より火へ森の所と云

塩屋天神 塩屋村より村中の生土神といひ菅公と祭る

慧日山光明菴 丸龜より五丁許西の方街道の南の傍より塩屋村より属久世俗傍堀に

本尊 阿弥陀如来 始に浄土宗なりしが後真言宗となり故大日親言おも

法然堂 本堂の右の傍より圍先大師の像と安ん

傍堀水 本堂の右の傍石階の下より至ての清泉なり

傳云往昔法然上人傍堀の井より穿ら給ふ所の井なり故地名とも傍堀

と号し惣じて海きの井水は大概湖の氣とて鹹く食用に成り

此井水海を連ると之も頗る清泉なり夏目も減るる支なくその冷

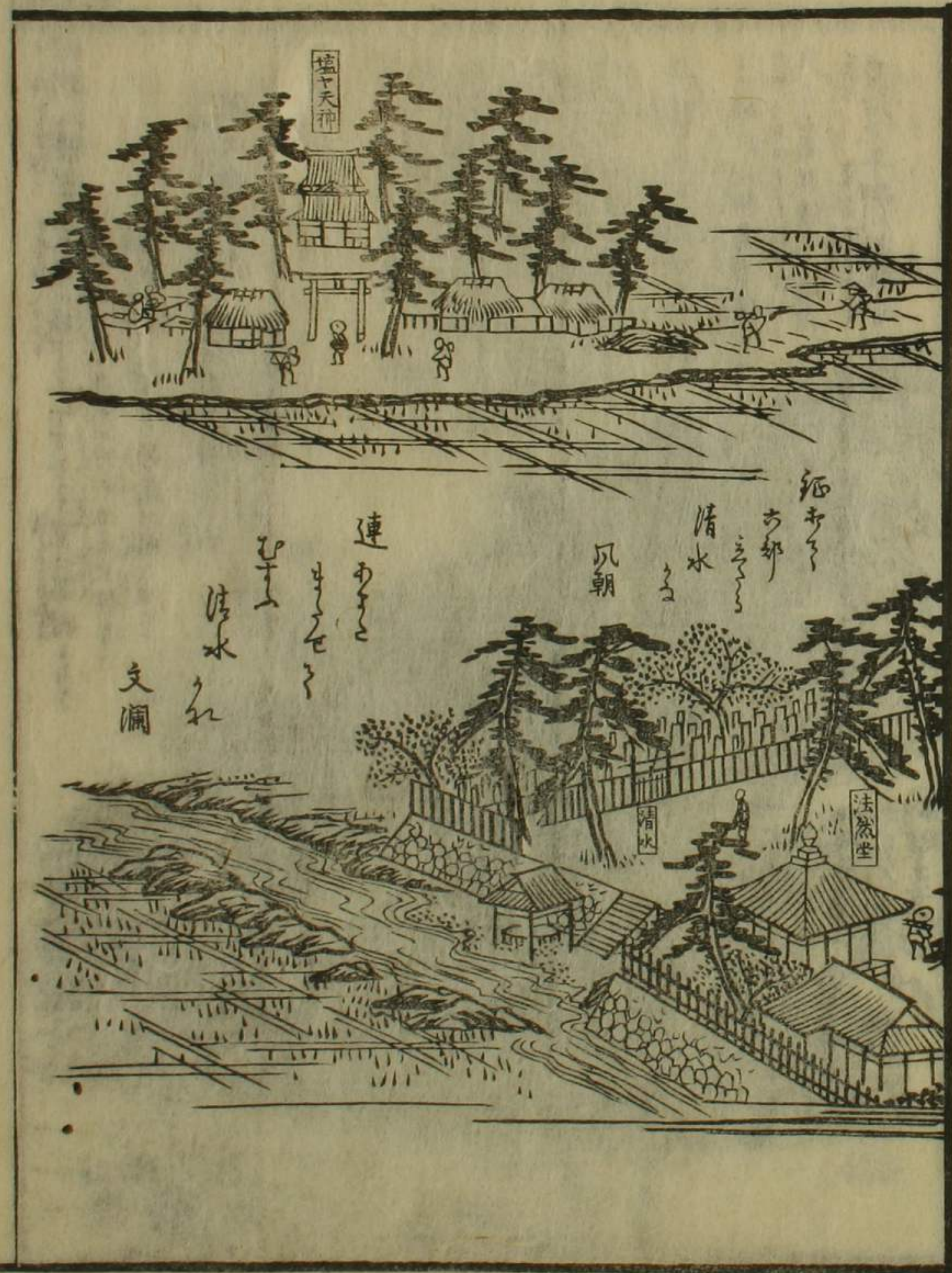
けり夏言給ふ絶は街道の傍小標の石と建つ狂哥と鑄け

南無の船つと傍堀を掘清水未の世までも佛くと佛

法然上人傍堀の水

兼元元年春愚谷の注然上人上佐国に流るれ給ふ然るに讚岐の国八月輪殿下の所領りて以此此國に配し那珂郡子松庄なる生福寺に著せりて其折らるる小も在りてこの井と穿らるる





田潮八幡宮

丸龜の城下より千丁なり東土器村あり  
村中ついで丸龜の市中半土生神あり  
社頭の園に安んじ拾遺の編み出と

頼之掛引松

八幡官馬場光の傍にあり  
徑凡十五間余主人畧して頼之  
松と云

細川右馬頭頼之の陣

士卒と指揮せし古跡なりと云

細川足利の氏族は建武の

始細川郷律師定禪當国

入を旗とあひ國中とまひく

より刑部大輔頼春蹟と云

夫より右馬頭頼之の

貞治元年細川相模守



清氏と合戦の時

宇多津城と築

其後伊豫の河野攻る

とて此辺軍卒掛引の

場所なり又此より二三丁

傍魚砂といふ所と松原の林

より王俗駒が林といふ是も頼之

味方の駒といふ一地方なりと云

羅山林先生

細川頼之者義満之輔佐也

其調護之功居多且勸之以平南方

繫九州遂為四国官轄也

執事之重奉世知之ヲ



青之山 鶴足ははらり雷国の名山なり古奇なる青の山風を録す此山なり

小鳥明神社 青の山にあり山上より此所の生土神なり祭日鳥来つて所世と云む

龜石権現社 奇津の街の西の端の海辺なり

村老口碑書云

つゆ天文十年此浦の未申の方より夜より怪しき光りてのるる海と云思  
せる支敷日かして漁事より人漁者も行業と夫は是に依りて金毘羅  
大権現之祈誓とけ相款と漁者も毎夜海原と空しく眺居る折に  
同年六月十七日夕百歳も余とるる白髪のお翁がうもも此河  
の龜の形を石の上よりまき此漁者も招き示し此以未申の方より光  
くるところ象の火災と焼法ありける靈像のまかり急ぎ世を  
彼や若げ彼尊縁と存り清浄安置せし告終りて失り滅漁  
者も奇異の思ひとて明るもまが別この本と壱羅とて象改山へ

金四ノ十九

緒急ぎ此と告れ一山の僧俗打やうと此彼と尋ひ奉るに本社

の傍に柱控より大木の焼残りの有指大徳の小像魏然として立て給り

人々より取やう一堂に安座し奉る是則ち今の觀音堂の本と云これに

漁者もい彼頭一老翁よりも連て金毘羅神の頭は正浴してのほ

利益と云と奉る毎季六月十七日と縁自となりて龜石大権現を唱り

奉る遠近の村人此より之給ひし石を悉緒し群集する事今もたす云

鶴足津 務足郡にありて号く諸社入津の湊とて商家建つてけり

鶴足津城 貞治元年細川左馬頭頼之の地を城と築き相換守清氏と戦ふ清氏の

佛光山道場寺 宇足津より西四圍通孔茅七十八番の礼所なり

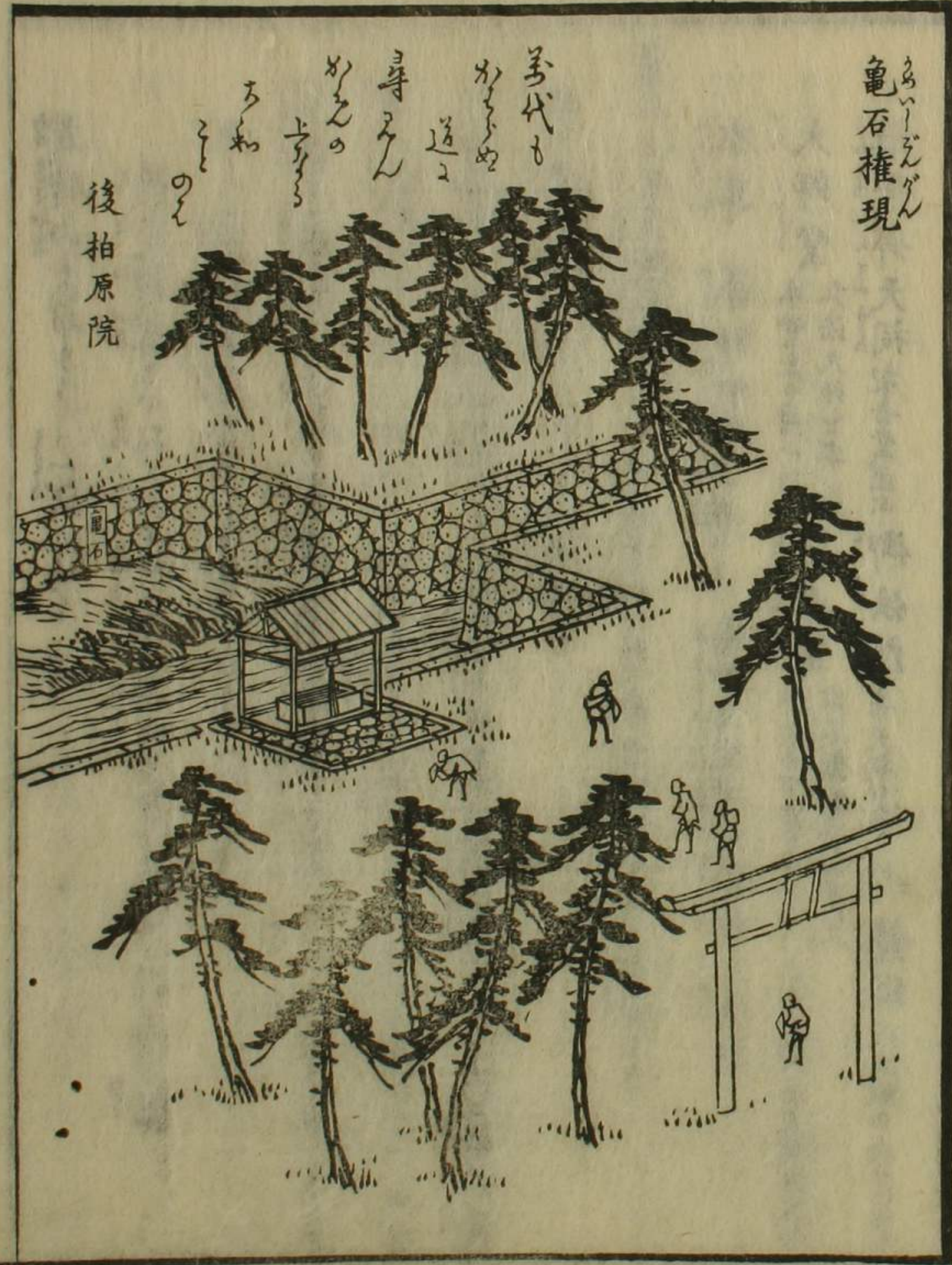
本尊 阿弥陀如来 座縁長一尺八寸弘法大師作本堂南

大師堂 本堂の後より弘法大師の像と云



金四ノ二十





龜石権現

後拍原院

玉代も  
かきぬ  
道  
尋  
かきの  
あわ  
の

庚申堂 本堂左の傍より青面金剛童子と安置  
 茶所 常提待より庚申堂より鐘樓 茶所の向より  
 本坊方丈 本堂の右の傍より名木の桜 本坊の前より  
 茶堂庚申堂の傍より眺望せし瀟海漫々として塩飽の島々漁船追風  
 小走る通船宇足津の泊舟など眼下より風景言ふ絶なり  
 或曰高野山の道範阿闍梨根来の夏より仁治四年當国へ歸還せし  
 給ふ其始宇足津の幹橋氏に預けし道範自ら祀せし中在家より  
 引上りて堂舎宇僧坊あり所小移しをり此所地所殊佳東望みん  
 孤山夜月とよげ月輪の観と勸め西へかへて遠島夕日と合し日想観  
 自ら徑後か松並聲へ海中より  
 いびいびいびいびいびいびいびいびいびいびいびいびいびいびいびい  
 松風の浪もあそぶなりせ

金四ノ五二

或時山よのやりく己波し

務足津深この松蔭の風をを山のふもとにひくのたふ浪

思ふ道範寓居の寺の蓋此寺をらんくうくと去

圓龜より右に四國の靈場と通礼する輩に當寺を必く祀らんとす

故に金剛杖と寺より出に上は弥陀觀音勢至阿字木の梵字と記して四句

の文と書くに在る教殊れんと足中堂履先慈木の形せしものと出に遍

路の徒ふのく是とけく順禱を

壹平山室光院聖通寺 聖通寺村より聖室理源大師の寢基あり

本尊 藥師如來 石像あり 海中出況沖之藥師と称ん

大師堂 本堂左の傍あり 觀音堂 本堂の下方あり 正面觀世音左理源大師

鎮守辨天祠 觀音堂並 御供所 弁天祠の前あり 鐘樓 弁天祠の向ふにあり

本坊 境内の右の傍より野澤の水 門外の傍にわろ通津毛双の清泉あり

當寺の八皇五十六代清和天皇貞觀十の聖室理源大師の開基より則聖室の

當國狹谷路に生る歳十六年中七真雅法師を投し出家して三論と元興寺の

願曉に学ぶ金剛峯寺真然おひ源仁に習ひ七密教の秘奥と稟け貞觀十

年故御沙弥高狹谷同一法と用んじ給ふに其地狹隘なるがゆへに寺院といと

むむに足らぬ故に此寺と建て聖室の二字とて壹平山聖通寺室光院と

号し本寺の薬師佛に其草創の区め海中に夜光のりのりて恰も燭けしと

上に常の雲氣あり奇異の思ひとは終に漁人網と下し引く鱈魚の如く

かゝく動ふに廻し入水に没し長袍と係り牽き引あぐるに石像の薬師如

來かり端巖妙扉ふしと慈悲の相と取と凡入驚嘆し遂に身證と結

と其像と庇ふ今其跡を薬師といふ 斯る其奇異の佛像あると云ふ

當寺の本堂と凡利益はくもろく故に貴族も亦群衆も奥の業師  
と稱し尊信に

聖宝其後あま去り醍醐寺に用と頭密の二教と演ぶ介しとま  
南都東南院と建く三論と講を寛平二年貞観寺の座主となり

延喜二年僧正となる同八月廿七日普明寺に於て逝は時年七十八

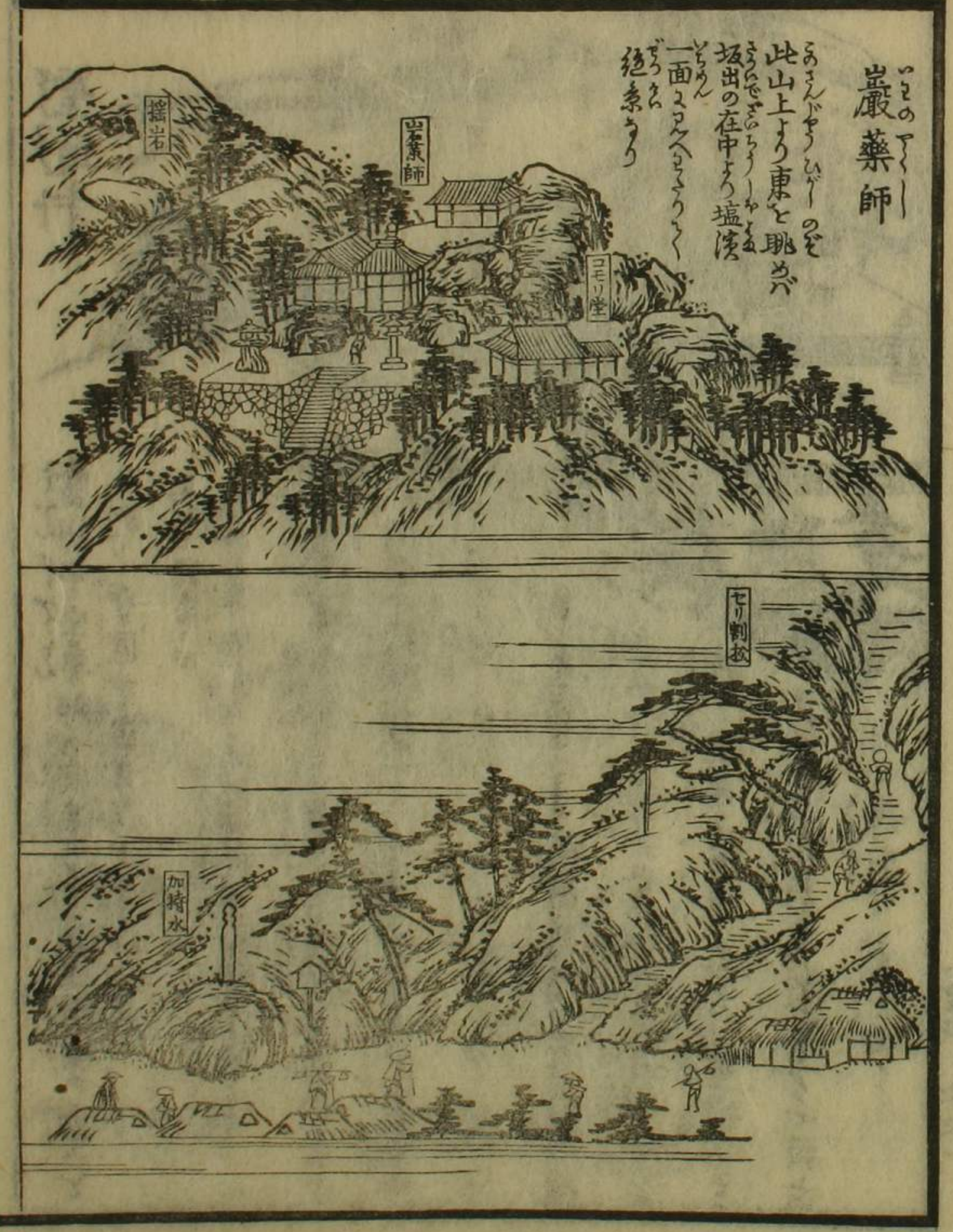
巖ノ薬師 本堂の左の山上にあり往昔岩と穿ちし時中より出れし故に岩の薬  
師と番山の奥の院と稱し其後あま去り醍醐寺の普平坐主と爲り絶は

加持水 岩の薬師の誓あり別と在床の傍に 世利割松山の半腹あり巨岩の間より生は

揺巖 岩の薬師より二丁許上にあり丸一文余入るれと動き巨岩たらしめ揺巖と号す

聖通寺山城 本堂の右の後の山上に古跡あり天正年間奈良太郎兵衛権左衛門

天正六年の夏藤目の城と後向の條と鶴足那珂二郡の旗頭鶴足津聖  
通寺山の城主奈良太郎兵衛尉勝政とあり



巖ノ薬師

此山上より東と眺み  
坂出の在申より塩濱  
一面をなすなり  
絶系なり



當山聖室尊師の因基をたぐひて聖室の二字と  
 くのく聖通寺室光院と号す

元亨教書に曰  
 仁和三年勅額をて信法河督掣佐と賜り

寛平二年貞観寺の座をとり同二年僧正と号す

同九年醍醐と賜りて官寺と改めりて聖室の南水

二京を普く遊行し其支配せしむり所と

言ひ東西の二寺醍醐東大寺および興福

寺ホかり延喜九年四月より普明寺よ

於て病席より勞をとりて太上皇御幸す

りし其心地とてひたすり七月六

日と歸寂せしむると云々

天正十三年仙石権兵衛尉秀久、當國と賜る然るに此國年々乏依のそ  
 曾我部元親、親望は、救回戦ひの術と、の、國中馬の蹄、かり、田圃荒廢、  
 芒所となり、民庶困窮、一、年貢と、關如、以、故、其、張、本人を穿鑿、して、及、捕、て、終  
 小十三人、宇、足、津、聖、通、山、の、麓、に、於、て、釜、と、居、て、煎、殺、と、斯、く、是、と、見、懲、に、と、れ  
 ぶ、か、つ、く、民、懷、が、び、く、山、間、幽、谷、に、逃、走、る、か、と、は、國、中、に、ま、り、ん、度、と、お、そ、れ、  
 刑、と、行、ふ、夏、嚴、重、か、り、尤、香、東、郡、安、原、山、の、先、主、香、西、伊、賀、守、が、巢、穴、か、り、願、中  
 の、子、女、と、入、置、た、る、匿、家、な、れ、山、人、等、是、と、罪、せ、ら、と、ん、と、怖、く、山、中、に、出、と、近  
 郷、の、氏、大、命、と、く、誘、ひ、く、山、中、に、引、出、し、容、徳、の、罪、と、て、山、主、安、原、甚、太、郎  
 其、下、の、頭、人、十、二、人、宇、多、津、聖、通、寺、山、の、麓、に、於、て、煉、か、く、る、其、下、の、凡、民、百、余  
 人、獄、門、に、梟、其、暴、行、と、見、く、凡、下、の、軍、程、四、方、に、逃、去、と、せ、  
 嗚、呼、戰、國、の、支、の、同、い、と、ほ、く、怖、ろ、と、れ、今、太、平、の、御、恩、澤、に、浴、し、昼、の、終、日

金四ノ五

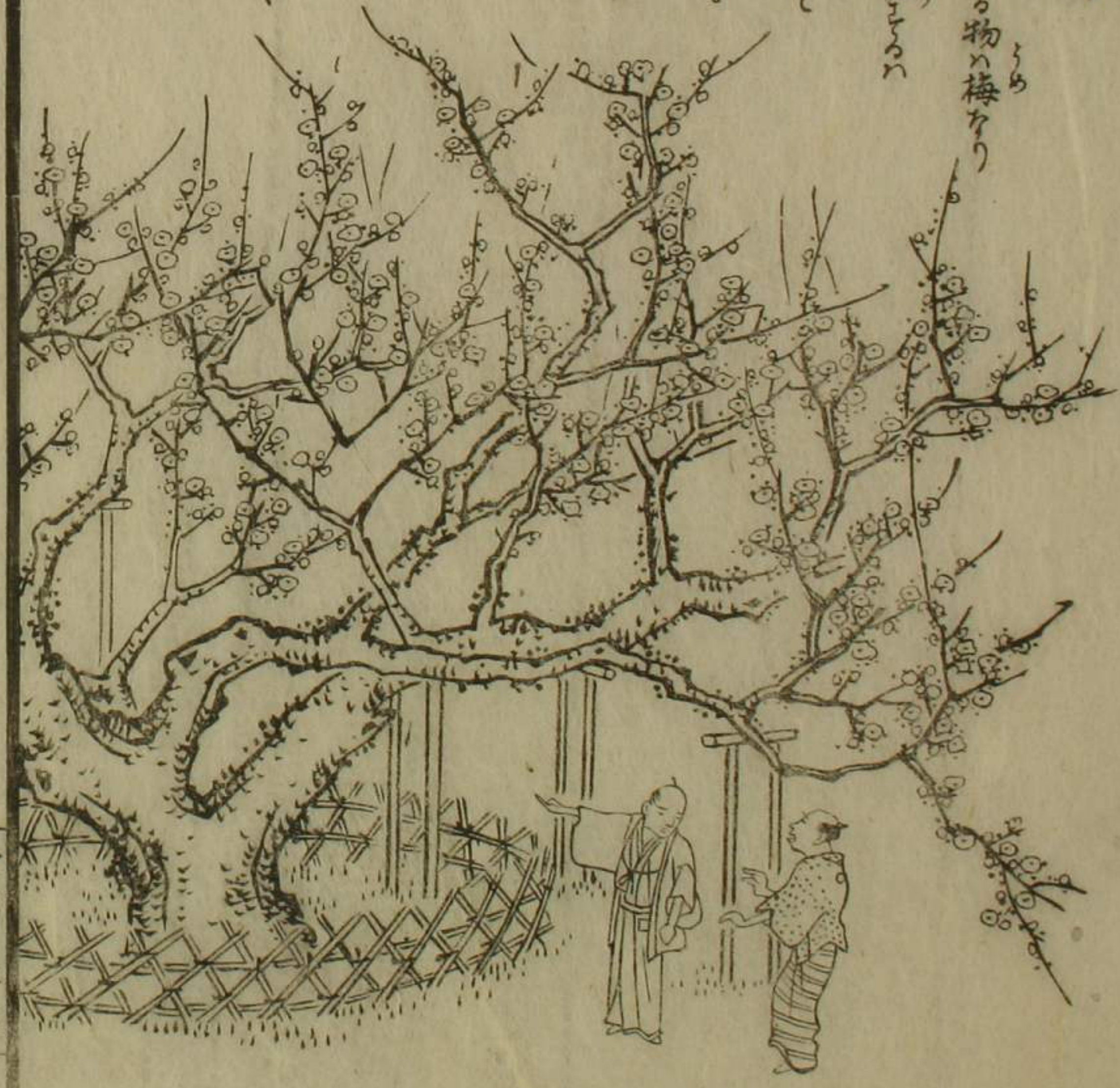
産業と、凡、の、ま、ぶ、く、勤、め、夜、の、枕、と、女、と、に、お、く、夏、寐、も、ん、も、被、ひ、國、困、と、さ、る  
 べ、か、ら、い、され、が、國、政、の、扱、と、り、上、と、殺、ひ、下、と、憐、と、身、と、は、つ、と、業、と、専、ら、と、  
 人、の、害、と、成、(き)ま、い、露、を、り、も、爲、ら、る、本、意、と、つ、べ、  
 川、津、の、梅、  
 川、津、村、高、木、氏、庭、中、に、あり、奇、津、より、十、三、丁、丸、丸、と、り、三、十、丁、余、幻、版、の、山、の、麓  
 あり、先、祖、高、木、右、馬、之、女、と、よ、る、大、力、の、人、わ、り、旧、家、に、梅、樹、の、り、も、四、方、に、梅、樹、  
 古、國、と、  
 梅、樹、の、高、と、二、丈、二、尺、余、  
 本、の、廻、り、一、丈、三、尺、余、  
 廣、さ、五、畝、十、五、步、  
 東、柱、の、數、九、十、六、本、  
 今、古、本、と、な、り、く、昔、の、で、く、さ、ら、ん、と、  
 天、に、滿、地、と、り、梅、の、白、い、う、れ

飯、の、山、  
 川、津、村、の、山、分、り、由、國、并、の、名、山、に、い、く、と、り、櫻、枝、の、宿、す、も、移、り、又、カ、山  
 も、号、し、  
 溪、谷、に、これ、と、や、露、土、と、い、の、山、朝、け、の、烟、け、ね、日、も、は、  
 西、行、  
 飯、山、權、現、社、  
 山、上、に、あり、溪、谷、の、國、造、誓、住、王、の、灵、と、お、る、女、と、不、劫、明、王、兼、師、佛、女、  
 置、の、ま、り、  
 鷲、住、王、の、人、王、十、八、代、履、中、天、皇、の、后、官、二、女、の、兄、の、鯉、魚、儀、別、王、の、子、な、り

飯、の、山、  
 川、津、村、の、山、分、り、由、國、并、の、名、山、に、い、く、と、り、櫻、枝、の、宿、す、も、移、り、又、カ、山  
 も、号、し、  
 溪、谷、に、これ、と、や、露、土、と、い、の、山、朝、け、の、烟、け、ね、日、も、は、  
 西、行、  
 飯、山、權、現、社、  
 山、上、に、あり、溪、谷、の、國、造、誓、住、王、の、灵、と、お、る、女、と、不、劫、明、王、兼、師、佛、女、  
 置、の、ま、り、  
 鷲、住、王、の、人、王、十、八、代、履、中、天、皇、の、后、官、二、女、の、兄、の、鯉、魚、儀、別、王、の、子、な、り

川津之梅

本朝の梅は花と林の梅なり  
 桜と梅の梅と林と梅なり  
 中古以来の梅のりともど  
 守り梅の梅の色香も  
 諸本にすべし百は元  
 だて雪の中は君子の  
 標と取一守りもすこ  
 其れ味よくて合  
 品とかりは美となり  
 人を助く凡天下の者  
 二つあり金と夏は



金四ノ卅六

花の元夏あけの必は実  
 ようやく實のよやくは花  
 とけり唯梅のよやくは雪中清  
 をねて一人と感せしめ  
 空の元夏あけの必は実  
 人よ益はやくの少かきん  
 花と梅のよやくは雪中清  
 高木氏のよやくは雪中清  
 上旬されは既したるの時と返ぬ  
 其幹枝の廣大かりは花の  
 旬はやくと目とおどろくふんと



春さくらん夏と秋は

飯山

象頭山八景

飯野山積雪

三々

あつら形と人も

あつらと

伊豆の山

言根えけり

雪のわけ

ほの



金四ノ元

千村萬落白重々  
満目無山不変容  
此日凝粧誰最美  
玲瓏天半小芙蓉

謙谷



坂出の川口とてふる便宜は  
舟着る由入津出帆平生  
に絶る在中高松街道の往  
還るれが旅客の通行する  
の往來志が商家建つる  
まゝ賑々たる地なり法四  
小の致丁の極冷積るるを  
なり宇多津より凡一里津東  
よりなり

其の質強力に... 身体を... 夏八尋の屋と馳越く... 皇其  
強力に... 使と... 是と召... 誓... 在王... 申賤... 交... 強力の者... 友とする  
夏好... 儀則... 正君... 友... 對... 喜... 再... 使... 召... 世... 行... 未  
未... 其... 後... 廢... 召... 給... 以... 年... 歴... 當國... 出... 郡... 河... 郡... 辰... 延... 強力の  
者... 取... 刃... 競... 夏... 壯... 勇の者... 友... 比... 相... 嫉... け... 斯... け... 程... 在... 宿  
の希... 依... 強... 後... 國... 造... 是... 給... 以... 誓... 誓... 住... 王... 率... 後... 列... 致... の... 豪... 友... を... 亡  
跡... 慕... の... 社... 造... つ... 是... と... ある... 別... 版... 山... 権... 況... 是... なり... 其... 孫... 相... 續... て... 其  
折... 守... ら... 此... 喬... 木... の... 有... る... や... 高... 木... と... 必... る... 氏... と... 比... 是... よ... う... 大... 力... の... 者... の... 出... る  
夏... 今... に... 絶... 然... 近... 世... の... 高... 淨... 山... 常... 善... 提... 院... お... ひ... 高... 木... 右... 馬... の... 心... ぞ... 呼... れ  
大... 力... 者... も... 其... 裔... 裔... 裔... 故... 二... 飯... 山... と... 芳... 山... の... つ... む... 以上... 南... 海... 治... 亂... 死... 出  
傳... 士... 往... 昔... 當... 國... 高... 松... の... 際... 下... 光... 頭... 寺... の... 住... 侶... 良... 純... と... 云... ら... る... 此... 人... 生... 得... 強

金四ノ元八



光頭寺の住僧強力



かおる世人日本無双の大力者と稱は是則ち高木民の子孫なりとや  
然とて僧の力も又子孫と傳へ故に怪力の血胤に絶つと云良純亦  
時修行の爲に東國に赴ひて砌り道と云ふが故に夜深に旅宿と云ふ  
里離れおかりたる道の傍に健う男四五人立ちあひて密に聲をこも其  
年饑饉かたば追利すると思ふが行が止まらぬ孫用がりさんと云  
彼男や御清路浪湯らんと呼ぶて前後より遮る良純彼男も人傑  
と打ち投殺せん事安きとて出家の身より怒心ひねりたが追拂ふまじ  
と思ひ並木の松のこままりとて走りかきりて曳といふまゝ根引してかきり  
一間より出まけり抜出ると手に引かきり打振ると松の枝葉大鳴り外  
に吹ぬ風と遠く微塵おたりんと罵ると盜賊まじく戦慄する人聞はら  
ぶら當り天狗の所爲と云ふと四方へ散り逃りぬ又武野馬より行り

よ七すまりの程の行どかきりて持て振るりて抜く馬の足並つものごとく  
かきり力と出ると体よはらば又二日如音の禪寺に珍客と清きとて新石の子水津  
とてそより良純の廻り束つとて是とてそより水津裏表に変わりてはこれに  
甚だ苦しく居らると言ふと刻限を亭午の時分より既三千人とて  
終日おろく居る巨石をれば如何とて容易く直り得ん哉と云ふ良純は  
愚劣とて逃りては候りんとて黒衣のよしたまきとてけ庭より下りて石を  
ふりくと推廻すに始め三千人ともてそより自由とて八分むらり水  
少くも震止は逃り得る禪坊の寺も無きやうもゆりもゆりも実を尋らば  
怪力かり入るなり夫とてや清庵方より石三石の縁とては還作せし  
よと祈るはなる是全く佛道の障得なり今日水津とては聖人と云はる  
より顔色太まより常の光嚴寺の面相よりは全く出さんと云はる

氣勢をばはさむやうこれ又備加の昔より一度出家となつた其用は  
 らん今より後止るべしやといひこれ良死をいふもかろと兼引これ  
 身終るまゝカと出さばと碎王給にさへり

飯神社 飯山の西麓より延喜式神名牒出穂足郡二座の其一なり

祭神 一座 飯依彦命 飯の山に至る夏宇多津より三里半

魚ノ御堂 坂出より三丁余南新廣村より今僅の小堂二宇あり兼師如末と安は

傳士姓古積留靈公毒魚と退治し給ふ其靈崇りよほく夜鷹行する

是と鎮めんが為建る所もいひ又行基菩薩海中より上り大魚の骨とあ

つゝ造り給ふも西流のつとよに積留靈公毒魚の流よりとり毒魚

退治の活い次々記せざむお畏る

八十八之水 小西の庄村の街道の傍より國中第一の清水より水源は五丁半たの山には  
 兼師如末の小堂あり兼入崇徳天皇の妻の流とあり

八十八水

或古遊場水

又一説と弥兼波書

又野沢の水とあり

往昔崇徳天皇山明御

ませ時御遺初の趣

皇都へいし奉るの間

玉體の損を給ふと

思慮して此清水を金指

浸し奉り介し

後此水より靈

服する者諸痛病

愈びてつる



園中へ清泉ありとて之を斯る涇澤なる夏よりまづらふ種は新智温  
泉流泉の類ひに似たり正出のとなり此水の汲汲泉や七水勢起り給  
も滝の漲るふ似たり原素三休の暑さか清冷なりとて斬が如く玄  
久素雪の寒さに似たり湿和なりとて菜と燗とも難くばれば往來の旅客  
日へ暑く熱い湯と聞や若熱と避け馬士馬と樹下より水を飲  
傍の西瓜素細心太美淋焼耐ふと冷しとある店に往行人れと冷  
炎暑の勞とて忘るる此水源とて凡是より五丁なる山の奥より湧  
出巖穴の其より石佛の乗師如來とて小堂と霞を傳ふらば此中より  
く石佛の坐して堂と營ひよりて堂内の床より安置せしる忽水止  
出ば衆人おろろとて如く石より下せば水湧夏本のじ故に此堂内本  
の在と祈り給る水源の石より湧るや實に奇異の清泉とていふべし

往古悪魚の毒中とる官軍と救ひ崇徳天皇の權と侵奉るの奇瑞を  
主会 往古日本武尊西洲の楚楚と征伐の折ら吉備の元海今之夏は吞舟の  
大魚より尊出陣の時其行推ふとれ南海にひく形と源は余後楚  
襲と退治凱陣給ふ大魚は還來つる吉備の元海の前楚楚の推  
舟向く客艘の楚ひとけり尊是と平らんと楚楚河野の山邑にひ  
大本と楚楚とと楚楚と客艘と造り尊自らこれに乗らる大魚は向く西魚  
まづ楚楚と尊の舟と吞ひ官兵おろく洋海にひく大魚と斬る是は依て  
魚轉倒し南の方福はつ船中に入る其氣はつら酔外尊一個魚は  
と切割り出給ふこれより國吏邑民のめりありと魚とては官兵  
と助け出陣時の童子忽然と頭を二瓶の水とひたつて来りて奉  
る尊はこれと給ふよ心は清明なるよとら問は曰此水はつら水とて



日本武尊惡魚之退治  
羅山抹光生  
日本武尊者  
景行帝太子也  
西征東伐以平  
國因設方集世  
其靈為神

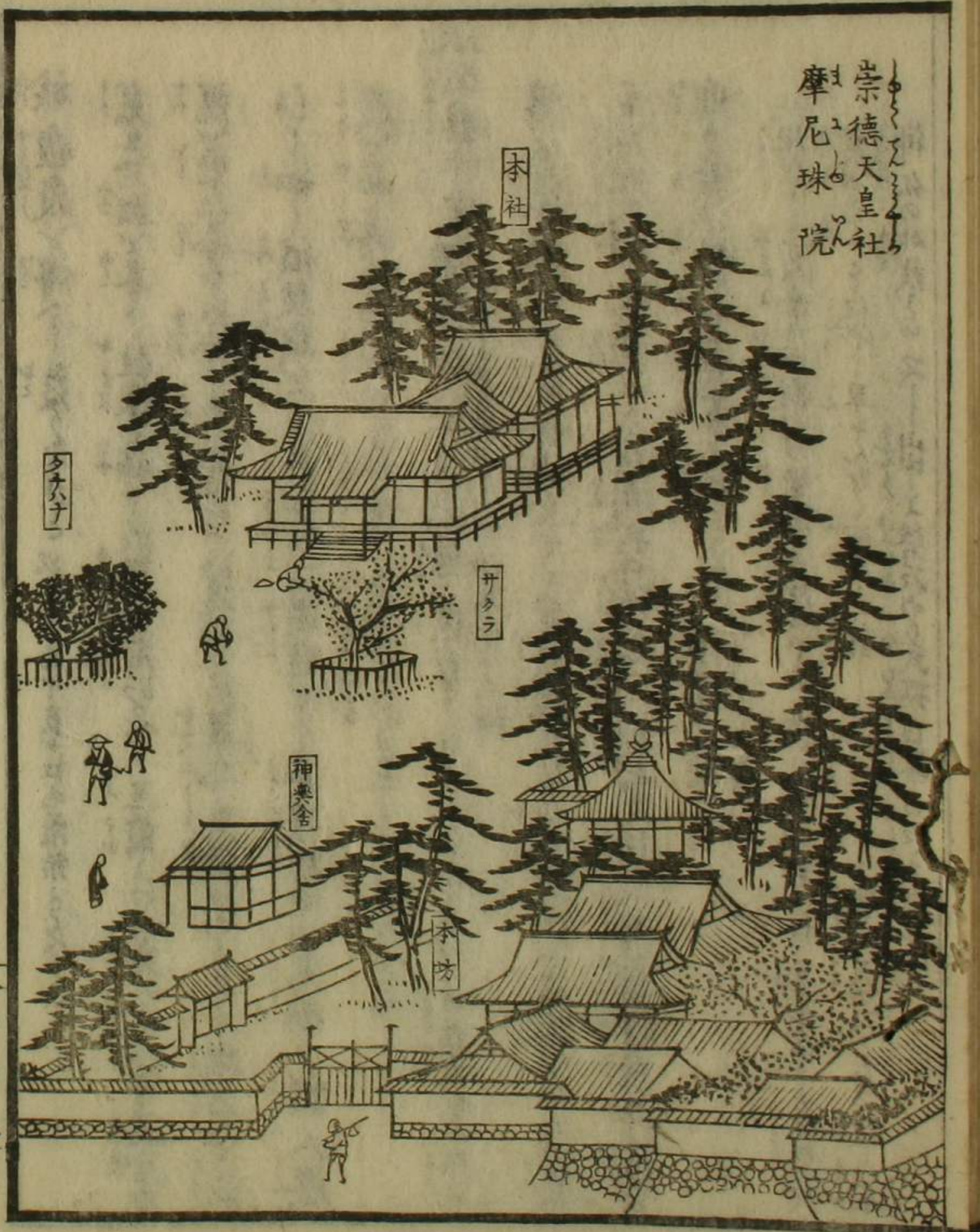
童子は皆此の惣夫の休湯の水を尊のたまはく頼るが吾も幸しも春の  
必死と被ひ給ふらんや童子は皆其毒氣を食ひて其清水を汲み其面を  
ぎぎ其口を春しむるに忽ち其毒氣を食ひて其清水を汲み其面を  
十生水とのとぞ 按ず八十生八十八ハハフホの 又云其附官去八十人籍室也  
故もつひ八十八人生及びともま 按ず八十生八十八ハハフホの 又云其附官去八十人籍室也  
叔亦此童子と云らん即ち地主横湖明神かゝり王道を助け神力を加  
給ふ夏仰ふべし尊やふく士卒と從く陸より給ふ浦人教く餉と奉  
故も此所と御供所と云 今世修羅と云 御供所と云 国吏有司群系く其治平を服び  
万歳と唱ふ此時尊の后妃穴武媛男子と産給ふ是武毅王なり其收  
ひ給ひて悪魚と平らけ給ふ功と武毅王の勲とくく後彼は留めて  
地を守らる給ふ故も国民後留王と称す

日本書紀曰日本武尊到吉備以渡穴海其處有惡神則殺之  
同 二十八年春二月吉備穴濟神及難波柏濟神皆害心以放毒  
氣令苦路人並為禍害之數故悉殺其惡神并開水陸之徑  
天皇於是美日本武之功而異愛下畧  
此時彼惡魚とも退治し給ひ物もらん又惡魚といふも書紀云  
惡神の夏もらん  
周云北冥魚あり其名と云ヨリスユスといふ安永年間より人コレ  
一レレキシキニテラルといふ書紀伯成語りたるハ僕水海と漂泊せると見  
洋中より傳あり凡團三聖針と号ん由 船と岸を看て流下り人々此舟本  
もたぐ河水もは扱船中より徳金と取をせり版と葉葉と者を食ひ  
終りまより船にうらまより三千里も走り多附依り大瀧を舟を渡

と思ひて之を獲て彼海をめぐり廻りて水中に沈みたるを舟に載せり  
喫せざるは是傳へ聞北海の大魚ヨリヨリスエ之は彼大魚の背たる水面  
浮ひしと傳へ心海危をあらうとなん獲りたるを又吾邦蝦夷の海底を  
討てて雷の如き響きよめる舟海上に航して入る表も周章漢進下ると  
りて是をききといふ大魚の海底を這る音も上は逐て其形をえざる者ほは我を  
もヨリヨリスエの類ひるまじ又唐人南海を這る舟なる海を這る舟を留めて陸  
小登り行更九式三里ぐる其終人家のりもことありふさき水家あること  
は海より大風吹おたり真機鼻を撰て類のりてく浪をくもくもくは  
多き船に陸岸を撈るまじく熟視せば海にあらはるる大魚の形を  
浮ひたるまじく有る斯く其臭氣にうきまるとその本國へ入りて後大  
徳と名し令とふと伝まより此病歐羅巴洲中へ傳渡るとは彼を

於瘟疫と傳へて發りたりと以上森島中良が紅毛雜話より  
是は紅毛の性來と悩す凡悪魚なりと且前より魚の御堂の疫癘の  
説と思ひ合はれ全魚の靈にあらはるる人々其臭にあらはるる瘟疫と  
いへ如く彼殺戮しては悪魚の腐爛せし奥襟那中へ充滿し諸人瘟  
疫と病を終ふに國中にも傳渡りて疫癘の行はるとのなりん  
水源藥師堂 前より如く八十八の水の傍に道ありて五丁より山々のせむ世信天皇の興院  
傳云往古瀨留靈公の御建立やう堂塔魏たる寺院なりが後年よおひ廢  
と弘法大師に登りて求聞持の法を傳へ給ふ此舟石佛の茶師の像と  
作り給ひ水の上を安置し給ふと云  
此はりよ一及余の田圃あり堂守の傍のいりて靈地なるがゆへ田圃と眞とのりて  
靈水自らそにひく早をんか何事も熱くく凶作かすと實に天のたをけ給ふ  
神仏の如きといふ一山中に巖石あり大槪白峯の石に似たり

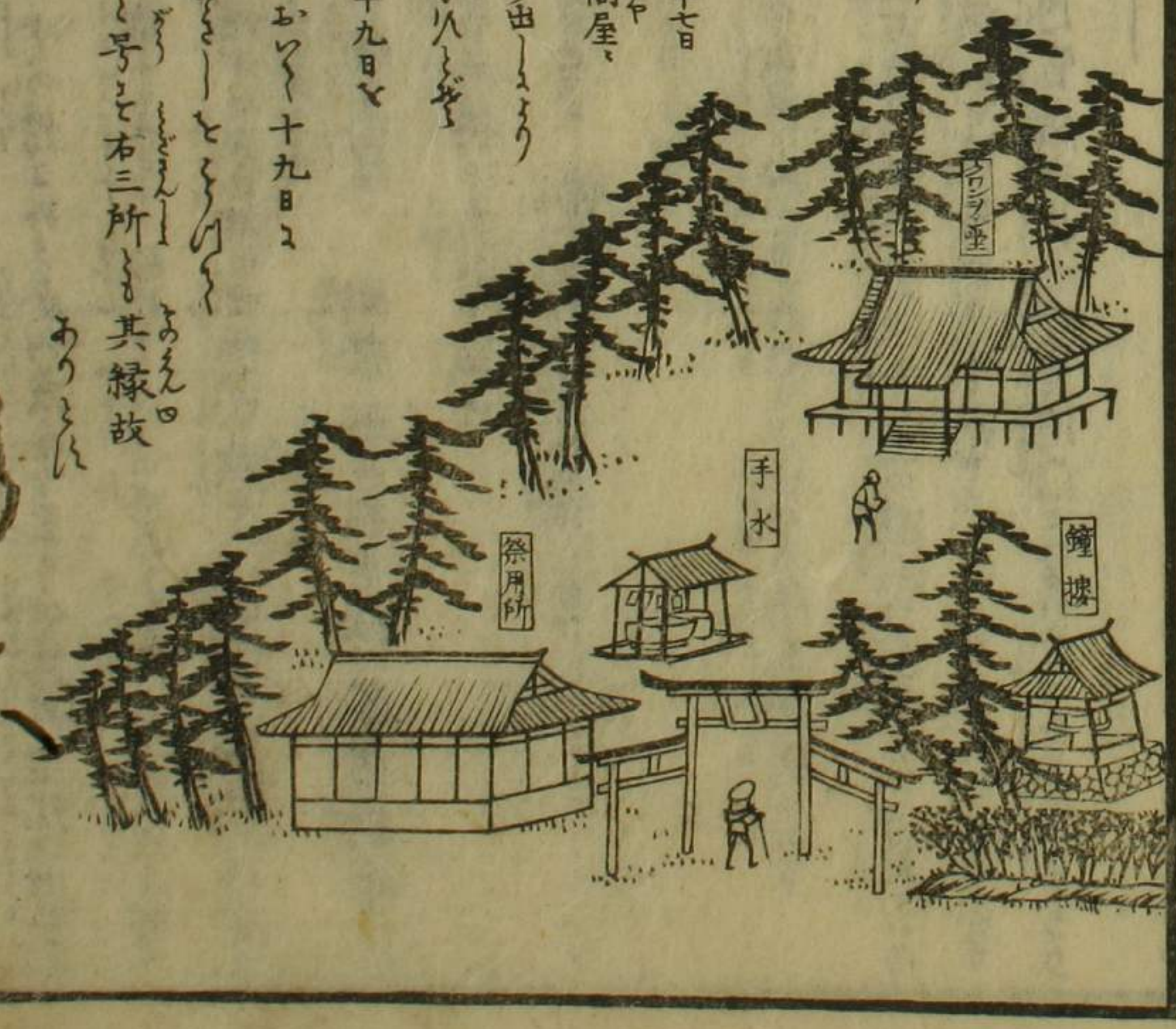
崇徳天皇社  
摩尼珠院



金四ノ四十五

傳女

當社の例祭九月朔日ふる  
夏ハ王葬と八十八の水と始て浸  
奉り一日と一日ト云々  
又高屋村ハ天皇の社あり是ハ  
九月十七日祭礼なり其来由ハ九月十七日  
王葬と白峯に登り奉るや高屋  
ふつ指中より御血のあまのり由  
其所ハ御宮と營血の宮と号し  
又青海村の天皇の社ハ九月十九日  
以て祭礼を行ふ是ハ白峯ふつ十九日  
茶毘奉り煙のたふびと  
彼方宮造り奉り煙の宮と号し右三所ハ其縁故



ありと

金山権現祠

水源薬師堂の傍より金山彦命とある金毘羅権現の旧社云

横鹽明神社

同山中にあり前々寺子と化現し八十八の水とて官去とをけ給ふ并に

天皇社

小西の庄村に有る村中の生土神之世俗にの通号と天皇といふ此社に

本社

一座 崇徳天皇 例祭九月初日 神輿渡御あり

拜殿

前々橋接の両樹と左右に柱由

神輿舎

拜殿の左あり 鐘樓 鳥居の傍より

祭禮用所

鳥居傍より

四脚鳥居

通例の柱の支柱に斜に亦柱ありて之を横本欄柵あり

度會延佳神主と左右の柱に女柱男柱と云上の横本の柱と云ふ此の

横本と云ふ所といふ此横本と流鳥けりて掛すといふは此の横本の柱あり

又延曆年中奏時之内官儀式状に不替御門といふ今の鳥居のまより

金花山摩尼珠院成就寺

天皇の社の左の方より四国遍礼七十九番の札所なり

本尊

十一面觀世音 立像長二尺三寸

大師堂

本坊の傍より弘法大師と安と

當寺に往昔弘法大師開基にして十面觀自在菩薩の靈像を安置し其の

金山権現と祭祀し奉り然るに長寛二年八月廿六日崇徳院崩御はすを

時金指と云ふ此小置奉り國司より供奉の余京師より此の同玉指

指のを給ふんやと云ふ金指と此は水に浸し奉りて是を是よりて之を官

依り神靈と宗め奉るる中

福江大師堂

福江村にあり大師十六歳の像とあり例年二月廿一日辰麻の傳云往古





惡氏山遍照院松浦寺 高屋村あり此所ハ初チ白峯の麓ニシテ八ノ番の前札取

本尊 弘法大師四十二歳之尊像 大師自作 世傳厄除の大師といふ

彌勒堂 大師堂左ニ在ル 十王堂 大師堂の右ニ在ル 彌磨十王と安ル

方丈客殿本坊庫裏 彌勒堂の左ニ在ル

樓門 四天王と安ル南面

求聞持石 本堂の前ニ在ル石垣ニ込メ凡ニ週ニ丈五尺余の巨巖あり

當寺ハ入皇五十二代嵯峨天皇弘仁六年空海四十二歳の時在任シ給フ

時ニ當山鳴動シ七地中より一大石發出其形室佛の如シ今佛石と云フ

石是ナリ大師此石上ニ坐シて國伽井と名付テ求聞持の法を行フを奉ル

亦自ら尊容と作りて安置 給フ是より今衆人厄除の大師と稱

シ此石ニ向ヒテ羊の思と免とんまを祈ル靈驗ありと云フ

白峯城 遍照院の境内なりといへ貞治元年細川清氏官軍ニ屬シ櫻波河波

三十六騎討死之古趾 林田村の片山の森に在リ清氏の良黨三十三騎と云

細川相模守清氏討死之古趾 遍照院より西南二半并より松山田と云ル

康安元年十月足利義詮將軍の執事細川相模守清氏將軍と恨ル

夏布のく南方に降る是より南方大将の印を清氏に賜ふ去程に清

氏貞治元年秋七月四國を討平らけ今一度都を傾け足利將軍と

亡ぼんとす余騎當國に渡り其處を震ふ此時清氏ハ白峯の麓に陣

とすといふ則ち遍照院の四面皆陣所なりと云細川右馬頭頼之ハ備中

在り此由を聞師と帥しつ潰刃宇多津に着一城と築き中國に

兵を率へて對陣に清氏の勢ははたしむも頼之謀を以て清氏に

兵を欺く清氏怒つて自ら力戦するに數回に及ぶ終つて討死す



討死の跡  
 露のたえて  
 細川のたえて  
 敢一紅葉ハ  
 見ゆ  
 鐘成



遍照院  
 求聞持石

貞治元年細川清氏と陣と是と  
 高屋の城といひ白峯の城といふと  
 一圓の陣所ありと且清氏が討死の地も遠く  
 彼芭蕉翁が高館とて変紳やつと  
 よしれいもふと  
 出

金四ノ四十八

清氏の陣は白峯の麓より頼之の陣は鶴足津之に其中間僅か二里あり  
 互小隙を窺ふく数日を送るる役も頼之の兵士の河波渡岐の連絡を絶せ  
 中国の兵士の備前国の任人飽浦権守信胤といふ者官方になら海と警  
 固阿波の小笠原美濃守といふ者清氏と同心し海路をば寒ざらば  
 宇足津の糧倉を襲ふく兵衆日く滅せし清氏の兵威をうらみ諸國より  
 力する者迄七月廿三日の朝頼之惟帳と出く新開遠江守並行と云く言  
 て曰當國兩陣の躰と云るに故は日く後一身方日く旁は日教と云る  
 不計の難もはる今更と計るに中流源少将西長尾の城より是より兵と  
 指向く攻め形勢と云るに清氏も又兵と分つて城へ入る其時我兵  
 城と攻め偽勢とは向い城と取る筈とはと云く並道より兵と引く清  
 氏も城を寄し頼之宇足津より出く搦手にひらひ少兵と出く故を

欺は清氏と云る氣象の者これ二騎ふてもをせ出へ其死一を  
 く大敵と破るく新開遠江守に四國中國の兵五百余騎と消く  
 指遣を路次存在を大と放らる西長尾の城も向ふ清氏これと云  
 款西長尾の城も陥後廻らんと計るに中流源と援くべしを合方  
 左馬助從子掃部助二千餘兵と消く西長尾の城も向ふ新開遠  
 くの謀と云は足輕少く向く城下の存在を放は向い陣と云る  
 くる夜とて更なれば向陣の筈と云く燒捨く並道より白峯のふり  
 清氏の城も押寄る頼之兼と定めたる如く廿四日辰の刻搦手向い  
 先鋒二百余騎と二子に分く指向く阿の声と云る清氏と云る  
 我一身の兵勇も侵るはるれば寄子の旗と云く均しく二の本と  
 開く小具足と云り固めは袷の小袖と遣むり取く搦手馬と云

清氏討死

清氏が鋒を廻り、或は馬と共に尻居り打居ると又曾の鉢胸板をも破り、付くと田圃に死骸のやぶぞう嗚呼惜しむ。清氏自身は武勇に倅て將を道と失ひ、兵卒を用いらざり。更に其の猛將勇士も、運命に討たれり。知人更なる續く、助る兵もは其身、深田の泥まされ、頭は敵の鋒より只元曆のむじ木曾義仲が栗津



金四ノ五十

討つ曆應二年の秋、新田義貞の足羽の純子とて討れり。其の異なり、人主將士卒、各其職をなす所の者あり。かゝる事、知れど支なり。兵

頼之歴社、尊氏義益、屢有軍功。細川清氏者、一時之勇士也。頼之在、四国運啓策、俄攻其城。清氏戰死。南海漸懷頼之惠。消義益之指、館也。頼之來、京師、補翼義滿、誘以治道。勅以武術、明德之役、軍謀居多。此後、兵革寢息。足利氏得、累洽之福。著頼之功業之所為也。



上帯しぬ唯一騎かけ出せば相徒ふ兵三十余人物具とも駭と固まりて  
頼之戦列と整ふる兵十餘人中へかけ入り公方に死らば人壽も二十餘人  
清氏も三十餘人破らば人馬もも辟易せり野木備前次郎捕原  
孫四郎二人も清氏馬の前輪を引つけ頸を切る太刀の先を貫き指して  
唐士天竺の支いさば我れ津洲に於て清氏も勝る勇武の者やむ故  
も他家の者より大に達し師と笑ふかと言ひりも只騎多兵の中へ廻る  
飽まら馬強る打物の達者なれば北を逐て成落し其津に廻る者人馬  
ともに打居らる爰に備中の國の住人陶山三郎と備前國の住人伊賀掃  
部助と武人田の中なる細道と辭と引くや清氏追討る人々と諸邊と  
合せて馳行し陶山中間傍なる溝を下まき清氏も草摺と突入  
この後するれもまきとて感動し清氏故の事と棄んと太刀を逆

一校突き立ちたる備中の住人真壁孫四郎馳入り太刀を當倒さん  
とて清氏走り入り真壁と馬より引落し中に指したとて伊賀  
掃部助高光馳合する敵と切り落し清氏も行達んと東西に眼張り  
折し真壁の中へ提げ其馬に乗んとる者あり穴駭しと勇力なる凡夫ふ  
有べし大願ふ折のまじと富と車違ふ馬と馳て清氏と延清氏も摺り  
助と射向の袖の下まき頭とかんし掃部助も早き者あり従と均し  
清氏も獲の草摺とまき上げ三カに刺し弱る折と押し頭と取る  
とも名高き勇猛の将なれども一人の武勇とまき續く身方もあ  
治郎左衛門尉と珍本孫七郎と武人の外に折同士の者もあし  
遍照院東南三丁并あり 弥陀之橋 同三丁并正南あり大師在世の時  
弘法大師加持水とり入 弥陀佛面向あり水と  
寺より三丁并東あり傳云大師水とまきひきまきし湯杖とまき川底と  
突まきし水ぬけ出く一湯もまきあり

底無川  
窓伽井

五夜が獄 通照院の正向の山より此岩窟は大師の本として五夜のおつて控りしむ

雲井御所旧趾 ひしあき又大永の辰自共居士といふ道人来りて此窟より入るとり  
林田村滝氏の宅に碑あり此家は在庭野者夫高遠の後孫

保元元年八月三日崇徳院遷宮内ねの津小着せ給ひて国司を

御所と造り出さざれば在庭野大夫高遠の作り松山の御堂へ入る

せらば則ち此堂は在庭の檀寺なり此所は三基一寺り後輩が岡に接

せ給ふ此御堂を縁せ給ふ御製也

あつてもさしむぬ雲井となりむる空の月の影をさす

これに依り雲井の御所といふ又林田の御所も又碑文を旧趾の巻

拾遺の編を委しく出ん

金毘羅恭緒名所圖會卷之四終

